
花葬

淡屋林檎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花葬

【Nコード】

N1514E

【作者名】

淡屋林檎

【あらすじ】

本当は永遠なんてないのだから。いつか別れることを前提に出会ったのだから。精神病棟で繰り広げられる悲しい恋の物語。

1. 罪証

神が求めているのは、
犠牲ではありません。

愛です。

「コーデイ」

高く白い天井、
冷たい床、
白い無機質なベッド、

何もない。
希望も絶望も。

時間さえ認識する必要のない空間で夢を見ていたわ。

ふわふわと天から純白の羽根が舞ってアタシに降りてくるの。

それは途切れることなく降り続け……

それでもまだ永遠は見つからない。

「ウィリアム」

天使を見た。

静かで何も無い部屋。

そこでただ残された時間。

死を待つだけの自分。

ここへ来た日から、涙と過去を捨てた。だから自分が何者なのかも知らない。何の興味もない。

ここへ来てどれくらい経つのか見当もつかないが、あの日。初めて踏み入れた部屋で、幻覚と踊っている天使を見た。現実を映してない瞳で天を見上げ、愛しげに空間に触れる。

何故、興味を覚えたのか、その姿に惹かれたのかは分からないけど。

ただ、無性に欲しいと思った。痛みが俺の身体を支配してしまわないうちに手に入れなければ…

最初で最後の望み。

天使の腕の中で眠りたい。

「コーディ」

ふわふわと舞う羽根に混じって桜の花びらが吹き込んできた。そこに窓があったことさえもアタシは知らなかった。

初めてその窓から外を覗いてみた。桜の木があつて、すでに花は満開。

そこに、寂しい瞳をした人が立っていたの。

アタシはその人の瞳が忘れられず………

恋をした。

鏡の前に座り込んで、そつと手で触れる。

『ジニー、起きて』

この鏡はアタシとジニーを繋ぐ、唯一の場所。

『おはようコーディ』

ジニーは鏡の中でニコリと笑って、アタシの頬に触れる。アタシも同じように、ジニーの頬に手を伸ばす。

『コーディ、なんだか嬉しそうね』

『うん！素敵な人を見つけたの！あの窓から見える、桜の木の下に立っている人よ』

アタシが窓の方に視線をやると、ジニーも窓の方に視線を向ける。

『ジニー、アタシ少し疲れたの。代わってくれる？』

『勿論よ、コーディ』

こうしてアタシは深い眠りに落ちる。

「クロルド」

僕はこの病院でカウンセラーを担当している、クロルド。この場所は、様々な事情で、恐らく二度と世間に戻ることはない患者がほとんどだ。

…ここは病院という名の牢獄。ただ死を待つだけの何もない病室。それをいつものように一部屋ずつ巡回していく。

いつも床に座り込んでいるジニーが珍しく窓辺に立っていた。

僕が存在を認めると、ニコリと微笑んで両手を差し出す。窓から見える桜。きつと風で舞い込んできたのだろう…その花びらを両の掌に乗せて見せる。

「綺麗だね」

そう言ってジニーの髪を撫でてやると、甘えたように寄り掛かってくる。

愛情に飢えた子供。

幼い頃に両親を亡くし、親戚に引き取られたが、そこで虐待を受け

凌辱された。

その時のショックでジニーの時は止まり、子供のままいつも夢を見ている。

精神的なもので口は聞けない。笑顔を見せるようになったのも、ここへ来て数年経つが、最近のこと。

ジニーは僕の袖を引っ張って窓へ導いた。

そして桜の木の下にいる人物を指差し、じっと僕を見る。

「彼に興味があるの？」

コクコクと頷くジニー。

よりによって何故、彼に興味を持ってしまったのか。

「彼の名前はウィリアム。ある残酷な罪を犯したんだけど、精神障害で罰を与えられなかったんだ。犯行後に自殺未遂を起こしたが、自らの手で死ぬことは許されず、結局は病に身体を蝕まれ、ここへ連れてこられたんだよ。そして自分の終生を悟ったのか、彼は記憶を捨ててしまった。もう恐らく長くはないだろうね。気付いた時には、もう手遅れだったんだから。持って一年：くらいかな。自分の手で死ねなかったっていうのは、法に裁かれない彼：犯罪者への罰かもしれないね」

半ば嘲笑混じりに言ってやった。いくら記憶がないと言っても、奴は犯罪者なのだから。

近付くのは危険だ。

「彼には関わっちゃいけないよ」

もっともジニーは一人で病室から出ることはないので…直接会うことはないだろうが。

風が吹いて桜の花びらが舞い込んでくる。ジニーの髪に絡んだ花びらを払う。

「じゃあね、ジニー」

挨拶がわりだと教えたキスをした。
何も疑わないジニーは目を閉じて僕に委ねている。

【ここにも小さな罪がひとつ】

「ジニー」

『コーディ、起きて！』
クロルドが部屋から出て行ったあと、アタシはすぐに鏡の前に座り込んだ。

『おはようジニー』
鏡の中のコーディはいつもの笑顔でアタシの目の前に座り込んでいる。

『コーディ、彼の名前をクロルドから聞いたわ。彼はウィリアム、犯罪者よ！クロルドが彼とは関わるなって…』

『犯罪者…それでもアタシは彼を…。ジニー、代わってくれる？』

「コーディ」

クロルドとジニーは彼を犯罪者だと言った。
アタシは彼がどんな罪を犯したのか知らない。
ただ、彼の寂しそうな瞳が忘れられないの。

彼…ウィリアムに近づきたい。初めての衝動。

何かが音を立てて崩れていくような気がした。
降り積もる綺麗で柔らかな羽根の中に、埋もれるように横になり、
目を閉じた。

「ウィリアム」

この体はいつまで持つのだろうか。
痛みが日々を重ね、痩せゆく身体に限界を感じる。
早くしなければ。

薄暗い廊下を壁伝いに歩いていく。

もう、自分の足で歩くことすら苦痛になってきているようだ。
かなり長く感じた道程を経て、あの部屋に着いた。

妙な期待を抱え、そっと扉を開けると、部屋の中央で何かと戯れる

ようにあの人が寝そべっていた。
どこか虚ろな目をして。

現実離れた姿に、しばし見とれてると、ふと目が合った。
大きく見開かれる瞳。

起き上がって、じっとこちらを見ている。

「名前：何て言うの？」

呼んでみたくなって、聞いた。すると俺の前まで歩いて来て俺の手をとり、掌に細い指先で『コーディ』と書いた。

「：コーディ？」

復唱すると、はにかんだように笑顔を見せた。

「もしかして喋れない？」

コーディはコクンとうなずいた。

少し表情を曇らせて。

俺の言い方が責めているように聞こえたのだろうか？

そんな気持ちは全くなかったので、頭をなでた。

じっと見つめられる。

吸い込まれそうな程綺麗に澄んだ瞳。

「コーディ」

呼んでみると、コーディは柔らかそうな唇で声にならない言葉をつむいだ。

そして机の上から紙とペンを持ってきて『ウィリアム』と書いて見せた。

「なんで俺の名前知ってるの？」

『クロルドにきいた』

考えながら、ゆっくりと書き綴る。言葉を書くのさえもあまり得意ではないようだ。

クロルド…カウンセリングの奴がそんな名前だったような気がする。あまり良い印象は持っていない。奴も俺が嫌いなのだろう。そういうことは本能で分かる。奴に俺のことをどんな風に聞いたのだろうか。

「…そいつ、俺のこと良く言っていないだろ？」

遠回しに尋ねると、コーディはギュッと抱き着いてきた。一瞬、なにが起きたのか分からなかったが…コーディはただ俺に安心をくれたのだ。

コーディは俺の腕をとり、窓辺へ歩く。ゆっくりと、時々気遣うように俺の顔をうかがいながら。そして、窓からみえる桜の木を指差した。

その桜の木は、なんとなく惹かれて、花が咲き始めた頃からよく足を運んでいる場所だった。

あの桜の木の下で眠りたいと願って。

ちょうどコーディの病室の向かいに、俺の病室が見える。距離があるので、よくは見えないが。

コーディはその桜を指差しながら、また声にならない声で『ウィリアム』と言った。

「こっから俺を見て…クロルドに聞いた？」

コーディは俺の顔をうかがいながら、ゆっくりと頷いた。俺だけじ

やなく、コーディの方も興味を持っていたのだ。

この部屋へ来てからコーディと一緒にいると、先刻までの苦しさが嘘のように落ち着いていた。

この感覚は一体何なのだろう？

その日から、コーディが何も無かった俺の全てになった。

2. 幸福

「コーデイ」

ウィリアムがアタシの部屋に来てくれた。

アタシの名前を呼んでくれた。

そして、アタシの頭を撫でてくれた。

アタシはすごく幸せな気持ちになったの。

ウィリアムはクロルドのことをあまり良く思っていないみたい。

クロルドもきつと、アタシがウィリアムと逢ったことを知ったら良い顔をしないだろうな。

だから、ウィリアムとアタシの秘密にしたの。

ウィリアムはクロルドが正午の面会に来て、また夕方来るまでの間、アタシと一緒に過ごしてくれると言った。だからジニーに約束して、正午から夕方までの時間をアタシのものにしてもらったの。

アタシは嬉しくて…そして不安でいっぱい。

…何も上手く伝えられないアタシは、いつかウィリアムに飽きられてしまうだろう。

でもいいの。

本当は永遠なんてないのだから。

いつか別れることを前提に出会ったのだから。

約束通り、次の日からウィリアムはアタシの部屋に来てくれた。
何をするわけでもなく、ただ一緒に過ごすの。

時々、ウィリアムはあの寂しそうな表情で、遠く…窓の外へ目をやるの。

アタシはいつかウィリアムがそこから飛び去ってしまうような気がして、彼の服の裾を引っ張るの。

そのたびにウィリアムは苦笑して『どこにもいかないよ』と頭を撫でてくれる。

とても

とても

幸せな時間。

「ジニー」

コーディはウィリアムを愛しているの？

ねえコーディ。

アタシ達、二人でひとつよね？

アタシはコーディを愛している。

コーディもアタシを愛していると言ってくれた。

でも今、コーディはウィリアムを愛している。

ねえコーディ。

アタシを見て。

アタシに触れて。

…愛の重さが違うなら、神様、どうか天秤をアタシの方に傾けて！

アタシを独りにしないで。

ある日。食欲のないアタシにクロルドが『これなら食べれるでしょ？』と、フルーツのいっぱい入ったゼリーを持って来てくれた。

それはアタシの数少ない、好きな食べ物のひとつで、それだけは喉を通った。全部食べきってしまうと、クロルドは笑顔で『もう一個持ってきてあげようか？』と聞いてくれた。

本当はもう欲しくなかったけど、コーディにあげようと思い付いて、頷いた。

クロルドはすぐに冷えたゼリーを持ってきてくれた。

「友達がね、送ってくれたんだ。ジニーだけ特別だよ…他のみんなには内緒だからね？」

このゼリーだけじゃなく、クロルドはアタシに色々なものをくれる。
『特別だよ』と言って。

「じゃあまた夕方来るからね」

いつものようにキスをして出て行った。

でもアタシは知っているのよ。『挨拶だよ』と言ったこのキスも特別だって。

クロルドは愛されないアタシに、いっぱい『特別』というものをくれる。理由は分からないけれど。

クロルドはアタシの先生だから…。ただ甘えることを許してくれるの。

愛されてるわけじゃない。

「コーデイ」

ジニーと交代して、ふとテーブルを見ると、ゼリーが置いてあった。そういえば口の中が甘い。

きっとクロルドが持ってきてくれたんだわ。

しばらくして、ウィリアムが来てくれた。ウィリアムは部屋に入ると、いつものように鍵をかける。もし誰かに見られたりして、クロルドの耳に入ったら、二度とウィリアムに会えなくなるかもしれないから。

ウィリアムはアタシの隣に座ると、アタシの顔に手をやり、唇を舐めた。

「コーデイの口…甘いな」

アタシがびっくりしているのにも構わずに、キョトンとした顔で言う。

アタシは思い出して、テーブルの上からゼリーを取ってウィリアムに渡した。

「俺にくれんの？」

コクコクと頷くと、ウィリアムは子供みtainな笑顔で『ありがとう』と頭を撫でてくれた。

そして一口運んでから『コーデイの口と同じ味』と笑った。

アタシは胸が苦しくなるほどの幸せを感じていた。

そして、この幸せがずっと続くことを願った。

『ジニー』

夢を見たの。

コーデイがどんどんアタシから離れていく。

アタシは必死に追い掛けるのだけれども、コーデイになかなか追いつけなくて。

やっとコーデイの腕を掴んだと思ったら、コーデイはアタシの方を振り向いて、砂になり消えていくの。

コーデイ。

アタシのコーディ。

アタシは貴女の幸せを願うべきなの？
でアタシの幸福には、貴女が必要なの。

愛がほしい。

天秤を壊してしまいたい！

神様、こんなアタシを許してくださいますか？

【可哀相なジニー】

【現実気付いていない】

【本当はコーディなんて存在は…】

【現実と虚構】

3. 傷痕

「ウィリアム」

あの日から2ヶ月。

体調の悪さから、コーディの部屋に行けない日がもう10日にもなっていた。

コーディはどうしているだろう？

俺のことを想ってくれているのだろうか？

それとも、約束を裏切られたと感じているのか。

何もなかったようにまた夢を見ているかもしれない。

ずっとベッドに臥せながらコーディのことばかり考えていた。

遠くの向かいの窓に目をやりながら。

「ジニー」

「ジニー最近元気ないね」

クロルドが心配そうな表情を浮かべて、アタシの頬に触れた。

冷たい手が気持ち良くて目を閉じる。

「…何かあったの？」

そう尋ねるクロルドに、アタシはゆつくりと首を横に振って答えた。

最近、コーデイの様子がおかしい。前みたいな笑顔を見せてくれない。

どうやらウィリアムが会いに来てくれないらしく。

…コーデイが笑顔じゃないと、アタシも笑顔になれない。

コーデイの愛がアタシに戻ってくればいいのに。
そんなことを考えてしまう自分に嫌気がさす。

ウィリアムがコーデイに会いに来なくてなって、10日。

コーデイにも幸せは続かなかったの。

また。

いつものように。

「そう…じゃあ季節柄、憂鬱になっちゃってるのかな…？」
クロルドはアタシの髪を撫でて見つめている。

アタシはなぜか胸が苦しくなって、クロルドの首に腕を回した。
クロルドは優しく抱き返してくれる。

体温が気持ち良くて、アタシはそのまま眠ってしまった。

「おやすみ、ジニー」

クロルドの冷たい唇が触れるのを感じながら…。

「クロルド」

ずっと調子が悪かったのにな…。

…最近のジニーは元気がないというか、笑顔を見せない。食欲も落ちてるし。

原因が分からないので、何もしてやれない自分が悔しい。

明日、天気がよかったら中庭に連れて行ってみよう。

ずっと病室にいるせいで、気が滅入ってるのかもしれない。

ジニーの寝顔を見ながら、髪を手ですいてやった。

柔らかい髪に寝癖がつかないよう、何度も丁寧に繰り返して。

「コーディ」

「今日は天気がいいから中庭に行こう」

アタシは何も答えず、クロルドの手をとり、従った。
外は久しぶり。まぶしくて一瞬目眩がした。

そして靴を履いて土を踏むことに慣れない。

アタシは怖くなって、クロルドの腕にしがみついた。

「どうしたの？ ジニー…外は嫌？ 気分展開にいいと思ったんだけどな」

クロルドは溜息混じりに言った。せっかくアタシのために中庭に連れて来てくれたのに、アタシはその気持ちを踏みにじているの。
クロルドの顔が見れず、そっと腕を離れた。

目の前には桜の木。

木の下にはウィリアムが見える。

…ウィリアムに手を伸ばすと、ウィリアムはアタシに冷たい視線を向けて…消えてしまった。

…そこにあるのは桜の木だけ。

急激に強い孤独感が襲ってきて、そこに立っていることもできなくなった。全身に力が入らなくて、眩暈と吐き気がして…アタシはその場に崩れるように座り込んだ。

目の前にあるのは闇。
深く堕ちていく。

「ジニー!？」

額から伝う汗の生暖かい感触が気持ち悪い。
どうしようもなく、恐怖感に支配されてしまう。

クロルドはアタシを抱き上げて、病室に戻り、ベッドに寝かせてくれた。そして水で濡らしたタオルで汗を拭いてくれた。

「無理させちゃってごめんね。ジニーがこんなに具合悪いのに気付いてあげられなくて。…僕、医者失格だね」

クロルドにこんなことまで言わせてしまった。
クロルドは悪くないのに。
悪いのはアタシなのに！

アタシは迷惑かけてばかりだわ。

アタシがこんなふうに悪い子だから、誰からも愛されないのだろう。

『ごめんなさい』

そう謝りたいのに、声は枯れ切ってしまつて。

出そうとすればする程、喉が火傷したように痛く、苦しいの。

自己嫌惡に涙が零れた。

「ジニー、辛い？」

クロルドの方が辛そうな表情を浮かべた。

だからアタシは首を横に振って目を閉じた。

アタシのせいでクロルドが辛いのは嫌だから。

クロルドがそつと手を握ってくれる。

そのままアタシの意識は深い眠りに堕ちていった。

「ウィリアム」

窓の外へ目をやると、中庭にクロルドとコーディが来た。久しぶりに見たコーディは様子が変だ。

そう思ったのもつかの間、コーディは崩れるように座り込んでしまった。クロルドが慌てて抱き上げる。
そして向かいの棟に消えていった。

一体どうしたというのか？

俺はすぐにコーディの元へ行きたかったが、体が動いてくれない。
動いた所で、クロルドがいるので行けるわけがなかった。

やり場のない怒りと焦りが込み上げてくる。

どうして俺は何もできないのか。

「具合はどう？」

「最悪」

様子を見に来たハル先生に吐き捨てるように言った。

ふとコーディのことを思い付いて尋ねてみる。

「コーディって知ってる？向かいの精神科の棟の」

「コーディ？…聞いたことないな。向かいの棟ったらジニーぐらいしか女の子がいないからな」

「…え？ほら、俺の部屋と向かいの部屋にいるコーディ…」

「ああ、あの部屋か」

ハル先生は窓の外を見て困ったように、あごに手を当てた。

「お前の向かいの部屋にいるのはジニーだな」

一体どういことだろう？

ジニー？

コーディではないのか？

頭が混乱する。

本当は喋るのもきついが、とりあえず気になったことを聞いてみる。

「コー：ジニーはなんで入院してんの？」

「クロルドのお気に入りやから、俺もよく知ってるんやけどな。義理の家族に相当疎まれて虐待されてたんだ。それが原因で口も聞けないし、愛情に飢えて夢を見てる。現実にはないものを見てる。現実を見るのが辛いんだろ。かなり酷い虐待を受けてたみたいで、ジニーの身体には今も消えない傷痕が残ってる。結局、自殺未遂起こして、義理の家族も捕まって、身寄りがなくなったからここへ来たんだよ。元々は莫大な資産家の娘らしいけどな」

そこまで言うと、ハル先生は悲しそうな顔で椅子に座った。

「外界よりこのの方が恵まれてるなんて、不憫な子やな。ええ子やで。可哀相なくらい。誰かに構ってもらいたいらうな。一種の自己愛。誰にも愛されなかった代わりの。クロルドがよく面倒見たおかげで笑うようになったけど。はじめは何をしても言っても無表

情やったからな…リストカット…手首切るのも繰り返したし…。だ
いぶ落ち着いた今でもやっぱり、誰も信じられんのかもな。食も細
いし、ちょっとしたことでも敏感に反応するから、よく寝込んでる
みたいや。…そういえばクロルドが、春頃は元気にしたのに最近
また調子がよくない…って心配しとったな」

ハル先生は点滴を換えながら話してくれた。

「そんなこと俺に話していいの？」

「…なんでお前がジニーに興味持ってるのか知らないけどな。もし
かしたらジニーのためにも、ウィリアムのためにもなるんちゃうん
かなーって。俺の勘」

「……」

「ちゃんと寝るんやで！まだ死ぬには早いねんから」

ハル先生は冗談めかして忠告すると、病室から出ていった。

ジニー…コーディ…同一人物なのだろうか。

…とにかくにも、天使のようなコーディには、想像もつかない過
去があったのだ。

どんな思いで生きてきて、声をなくしたのだろうか。

そして今、何を思ってここにいるのだろうか。

故意じゃないにしろ、俺はコーディにひどいことをしてしまったのだ。

コーディはあの部屋で俺を待っていたのだろうか。

なのに、俺は裏切ってしまった。どんな理由があっても、それが事実なんだ。

精神の弱いコーディは倒れてしまった。あれは俺のせいなんだ。

早く逢いに行かなければ。

俺には時間がないんだ。

4. 過去

「クロルド」

一体何があつたのだろう。

この間、ジニーの様子がおかしくなったのは：通つてた野良猫が姿を見せなくなった時。

：誰かに連れて行かれたのか、それとも事故にでもあつてしまったのか。

だけど、いくらそう言ってもジニーは、自分が悪い子だから嫌われただんだと思い込んでいた。

ジニーは、なにもかも自分のせいにしてしまう所があつて、結局その自らの重圧に耐えられなくなってしまふ。

また、なにか裏切られたと感じるようなことがあつたというのか。

どうしたら、ジニーを救つてやれるのだろうか？

どうしたら、僕を信じてくれるのだろうか？

可愛い可愛いジニー。

どうして、医者と患者なんだろう。

眠っているジニーの汗を拭ってやりながら、僕は矛盾なことを考え

ていた。

医者じゃない自分が、ジニーに何をしてやれるというのだろう。

「コーディ」

目を覚ますと、クロルドの姿はなかった。

…頭がいたい。

急いで、鏡の前に座り込んだ。

『ジニー！ジニー！』

『ん…おはようコーディ』

少しやつれた顔でジニーが現れる。

『ジニー、お願い！交代して！頭が痛いの！割れてしまいそう！』
『勿論よ、コーディ。ゆっくりお休みなさい』

鏡に手を合わせて、ゆっくり目を閉じる。

闇に堕ちていくのを感じながら。

「ジニー」

ベッドに寝そべって、ずっと昔の夢を見ているの。

もう何度も繰り返し見たのだから、これは夢だと分かるわ。

…でも現実だったの。

昔は。

物心ついた頃から、アタシは他人の家に行った。

義父と義母…そして義兄。

義父と義母はとても義兄を愛していた。

『何もできなくていいんだよ。私達はお前さえいればいいのだから』

アタシは他人だったので、愛されるように努力した。
良い子になろうって。

勉強も運動も奉仕活動だって、できることは何でもやった。家族に
アタシを認めてもらえるように。

周りみんな『えらいね』と褒めてくれた。

だから、きつと家族の人もアタシを褒めてくれる…そう思ったのに
…何も言ってはくれなかった。

アタシの努力が足りないから？もっと頑張つて、もっと良い子にならなくちゃ、アタシを見てさえもくれない！

でも家族はアタシが努力すればする程に、アタシを無視するの。

…幼かったアタシには、その疎外感に耐えられなかった。

ある日、義父と義母がアタシに言った。

『せっかく引き取ってやった恩も忘れて、立場をわきまえられないのか。お前は息子の下にいないなければならないのに。お前のおかげで息子が周りに何て言われてるか』

『恩を仇で返すなんて』

『最低な人間だ！』

何を…どうしてそんなふうに言われるのか分からなかった。

それから、アタシが周りに褒められるたびに家族はアタシを嫌い、憤慨した。

殴ったり蹴ったり暴力をふるわれ、アタシがたまらず泣き声をあげると『うるさい』と外へ出されたり、倉庫に閉じ込められたりもされた。

義父に折られた腕は今も変型したまま、義母に煙草を押し当てられた火傷はいくつも痕になった。

傷が人目につかないよう、いつも長袖を着せられた。

アタシは気に入られるように、良い子になろうって思うのに、何一つ受け入れてもらえず。

家族の言うことは何でも聞いた。家族の耳にアタシの話が入らないように、外では目立たないようにして。

感情を表に出さないように：アタシはだんだん無口になっていった。そんなアタシは家族以外の人にも相手にされない。

そんな中、義兄だけはアタシの相手をしてくれるようになった。

色々なことをさせられた。
悪いことも。

でもアタシは義兄に命令されるのは苦じゃなかった。

だって、こんな誰からも愛されないアタシに構ってくれるのだから！

義兄は加虐的な人だった。

自分より弱い動物を傷つけたり、殺したりして遊ぶのだから。

アタシはどうしてもそれだけではできなくて、泣いて義兄に縋り付いた。

すると義兄は『じゃあジニーがあいつらの代わりになる？』とカッターナイフをアタシに向けた。

：恐怖で固まったアタシに『大丈夫。殺したりはしないから』と笑って。

アタシを自室に連れて行くと鍵をかけ、ベルトでアタシの手足の自由を奪った。

そしてアタシの脚にカッターの刃が触れた。

恐怖で体が震える。

義兄はそんなアタシを楽しそうに眺め……一気に力を込めて切り裂いた。

瞬間。内股から血が溢れ、脚を伝って床に血溜まりを作った。痛くて痛くて声も出ない。

義兄はその溢れる血を、うつとりと眺め『綺麗だね』と口を寄せた。そして傷口を舐められた。

そこに舌を差し込められ、我慢できる痛さじゃない。

『……っ痛い！痛いよお』泣いて訴えるアタシを見て義兄は『可愛いジニー。僕の人形だよ。愛してる』と言った。

手放しかけた意識の中で義兄の言葉が反芻される。

『あいしてる』と。

アタシの心は踊った。

それからアタシは義兄の人形になった。

義兄はアタシが良い子にしようことを聞いていればちゃんと愛してくれる。

義兄の愛が歪んだものだということは知っていた。

それでもよかった。

だって初めてアタシのことを愛してくれた人だから！

アタシは嫌われたくなくて…喜んでもらおうと、自ら肌を切って見せた。

傷が増えるたびに愛されてる実感を覚えた。

他には何もなかったから。

義兄がくれる痛みだけが、アタシにとっての全てだったから。

でもそんな幸せも長く続かなかった。

義父達に見つかってしまったの。アタシ達の歪んだ愛を。当然、義父達は憤慨した。アタシに暴行を加えて倉庫に閉じ込めた。

『世話した恩も忘れて！』

『もう二度と息子の側に寄るな』

『汚らわしい！お前なんかいらぬのに』

『どうしてまだ生きているんだ』

どうしてアタシは愛してもらえないの？

きつとあの人達の言う通り：アタシには生きている理由もないのだろう。

：アタシにはその価値がない。愛してもらえただけの価値がないんだわ！

もう何を言っても仕方がない。だって、あの人達はいつだってアタ

シの言葉なんて聞いてくれなかったんだから。

伝わらないなら、もう声なんて必要ない。

アタシには両親の遺した遺産があるから…お金だけがほしかったの
でしょう？

もう二度と義兄に会わせてもらえない。

おにい様は本当にアタシのことを愛して…必要としてくれてたんだ
よね？

義兄のカッターで手首を切った。

下がっていく体温…流れ出す血の温かさだけが、アタシに生きてい
ることを教えてくれた。

家族を見兼ねた近所の人の通報でアタシは一命を取り留め、そして
義父らは逮捕された。

義兄は精神病と判断され、病院に入れられた。

もう二度と会えない…。

本当に身寄りの無くなったアタシは、解放されたのと引き換えに、
声と表情を失った。もう何も信じなくていいと思ったから。

そしてアタシはこの病院に連れてこられたの。
ここは特殊な病院だと言われたわ。

ここには天使が住んでいたの。いつもアタシに汚れのない、純白の
羽根を降らせてくれる。

まだ姿は見えないけど。

いつかきつと迎えにきてくれるの。

そしてアタシに永遠をくれるのでしょうか。

……どうして、繰り返し、繰り返し、こんな夢を見るのだろう。
あと何度繰り返したら、アタシに永遠をくれるの？

思い出したくないの！
もう、許して！

お願いだから、アタシを独りにしないで…何度も…何度も。

もう嫌なの。

こんな過去を見るのは。
こんな夢を見るのは。

許して！

【終わりのない螺旋階段】

5. 愛情

「ウィリアム」

コーデイが倒れた翌日。

点滴を外してもらって、どうにかベッドから起き上がることができた。

歩こうとして、足を踏み出すと世界が歪み、倒れそうになる。だが、俺はどうしてもコーデイの所に行かなければならない。重い身体を引きずるように歩いた。

精神科105号室。

コーデイの部屋。

本来ならクロルドがいてもおかしくない時間帯なのだが、どうやらハル先生が何か謀ったらしい。

「コーデイ……」

部屋に入り鍵をかけて、コーデイを呼んだ。

コーデイは青白い顔でうなされていた。

「コーデイっ！」

：俺はコーデイに呼び掛けて、夢から解放してやろうと、コーデイの顔に手をやった。

少し身動いて、コーデイがゆっくりと目を開く。

開いた途端、涙が零れ落ちた。しばらくボーツと俺を見つめるその瞳から、涙はとめどなく溢れた。

「コーディ…？」

その瞬間。

上半身を起こしたコーディは、俺を両手で突き飛ばした。俺の体は倒れ、尻餅をつく。

コーディはテーブルまで走って行き、テーブルの上にあるメモに何やら書いて、俺に突き出した。

『あたしジニー』

『コーディとらないで』

決して上手いとは言えない字で、そう書かれていた。

「ジニー？」

そう言うと、彼女はコクンと頷いた。

「コーディは？」

するとジニーは部屋の隅に置かれた大きな鏡の前に座った。そして鏡に顔を近付けて、ジーツと鏡の中の自分を見つめている。

一体、何がなんだか分からない。

「ジニー」

目覚めると、目の前には誰かがいるようだった。涙で顔が見えない。しばらくして、その人物はウィリアムだと分かった。

アタシは：彼を突き飛ばした。そしてメモで、アタシがコーディではないことを告げた。

驚いているウィリアムの横を通って、鏡の前に座り込む。

鏡に両手をつけて、じっと見つめる。

『コーディ、コーディ起きて!』

『ん：おはよう、ジニー』コーディが笑顔で現れた。

『あのね、コーディ：ウィリアムが来てるの』

『えっ!ウィリアムが!?代わって：代わって、ジニー!!』

コーディは必死に鏡を叩いて、アタシに懇願した。

コーディの幸せは

アタシの幸せ。

結局アタシはコーディと交代して、深い闇に落ちていった。

「ウィリアム」

ジニーは鏡に向かって、手振り身振りしたり、さらには鏡を叩きだした。

まるで鏡の中の自分に何かを問い掛けるように。

しばらくして、ジニーはゆっくりと立ち上がった。

そして俺の方を向いて、声にならない声で「ウィリアム」と言った。

両手を伸ばして、何度も何度も「ウィリアム、ウィリアム」と。そして俺の前まで歩いてくると、俺の掌に『コーディあたし』と書いた。

「コーディ…なのか？」

そう言うと、コクンと頷いて、また俺の掌に『コーディあたし』と書いた。

急激に愛しさが込み上げてきて、コーディを抱きしめた。コーディの細い腕が絡む。果敢無いコーディの身体を抱きしめながら、頭を撫でた。慰めるように。

「ごめんな、コーディ。体が言うことかんで…ずっと起き上がれなくて。約束したのに、ごめん」

コーディは俺の胸に顔を埋めながら、首を振った。そして顔を上げ、微笑んだ。

俺はコーディの顔に舌を這わせて涙を舐めとった。

「…これからは、もし行けなかったらちゃんと伝えてもらうから。…一人、信用できる人がいるんだ。ハル先生って知ってる？」

コーディは一瞬怪訝な顔をして、コクンと頷く。

「んっと…ハル先生と何かあるの？」

コーディは俺の手をとり、掌に指で『いじわる』と書いた。

「意地悪？何かされた？」

コーディは少し考えて、首を横に振った。

.....。

「えっと……。あの先生、言い方とかキツイからコーディには意地悪に見えるのかもな。でもちゃんとコーディのこと見てくれてる。良い子だって言ってたよ」

またコーディは首をふるふると振る。そして俺が口を開く前に、掌に『ウィリアム』『からだつらい?』と書かれた。

「…大丈夫。コーディの顔見たらマシになった。いつもこの部屋来たら…ていうか、コーディの顔見たらすごく楽になる。やっぱりコーディは俺の天使だな」

コーディは頬をほんのり染めて俯き、大きく首を振った。その様子がとても可愛かったので、両手で抱きしめてベッドへ押し倒した。それから色んな所に唇を落とした。額、頬、鼻先……。唇の中に舌を入れると、コーディはキュッと目を閉じて一瞬息をとめ、深くはいた。

「コーディ…こういうことするのは嫌?」

少し不安になって聞くと、コーディは首を振った。

そして、目を閉じてコーディからキスをしてきた。軽く触れるだけの。

「俺はコーディのもの。だからコーディも俺のものになってくれる?」

コーディは目をパチクリさせて、それから極上の笑顔で頷いた。

「俺は信じてな？俺にはコーディだけだから」

今度は、ためらいがちに頷く。

「じゃあ、所有印残しとこ…消えたら何度もつけ直すから」

俺はコーディの…見えない位置…ちょうど鎖骨の下辺りをキツク吸って、キスマークを付けた。

「コーディも俺に、コーディのものだって、印つけてくれる？」

そう言うと、コーディはおずおずと俺のシャツを第二ボタンまで開け、同じ所にキスマークをつけた。

いまいち付け方が分からなかったのか、薄い痕だったけど。きっと2・3日もしない内に消えてしまうだろう。そしたらまた付けてもらう。

夕方までそんなふうに戯れながら過ごし、自分の部屋に帰る時間になった。

帰ろうと立ち上がると、コーディは俺のシャツの裾を引っ張った。

「もう行かないと…クロルドが来てしまう…」

そう言うとコーディは手を離し、俯いてしまう。

俺はコーディの頭を撫でながら「明日も来るから待っててな？」…諭すように言って、コーディにキスをした。コーディがやっと笑顔になって頷く。そして手を振った。俺も手を振り返して、大分楽になった体でゆっくり歩き、自分の病室に帰った。

『ジニー』という人物への疑問を頭に浮かべながら。

「コーディ」

まだ：まだ夢を見ているのかしら？

ウィリアムがくれた痕：そつと擦ってみる。

消えない痕はそれが現実だと教えてくれる。

アタシのウィリアム、

ウィリアムのアタシ。

思った途端、何だか熱くて落ち着かなくなった。

眠ろうと目を閉じてても昼間のことを思い出して。

アタシは鏡の前に座った。

『ジニー、起きて』

『おはようコーディ』

ジニーはいつもの笑顔で現れた。

『そろそろクロルドが来るから：交代しよう？』

『うん。おやすみ、コーディ。おやすみ…』

そしてアタシはまた深い闇に堕ちる。

「ジニー」

カチャッとドアがゆっくり開いて、クロルドが顔を覗かせた。

「ジニー、起きてるの？」

アタシは起き上がり、スタンドの明かりをつけてベッドに座った。

「起きなくていいよ」

クロルドが慌ててベッドの側まで来て、アタシの頬に触れた。冷たくて気持ち良い、大きな手。

笑顔を向けると、クロルドも笑ってくれた。

「だいぶ気分よくなったみたいだね。コーディは俺に遠慮しないでいいんだからね？無理もしなくていいんだから」

クロルドはそう言ってアタシを抱きしめた。

クロルドの手が背中から後頭部へ移動して、髪をすいてくれる。倒れたせいで洗ってないことを思い出して…アタシはクロルドの胸を押して離れた。いっぱい汗かいたし、きつと汚れてるから。

「ジニー？」

クロルドが不安な表情を浮かべた。アタシはメモとペンを取って、

『おふろ』と書いた。

「お風呂に入りたいの？」

アタシは頷いた。

「でももう消灯時間過ぎてるからね。明日の朝、ジニーが起きたら入れるようにしてあげるから。今日はもう、おやすみ？」

アタシは頷いて、自分からクロルドに『おやすみ』のキスをした。いつもはクロルドからしてくれるので、クロルドは少し驚いているみたい。

でもすぐに『おやすみ』とクロルドからキスをしてもらった。

クロルドの形の良い唇が好きで、重ねた時の冷たい感触も好きで。クロルドと『挨拶』をするとアタシはいつも心地良くなって落ち着く。

何だか眠れそうな気がして目を閉じた。

「クロルド」

ジニーからキスをしてきたのは初めてだった。

…いや、正しくは挨拶か。

僕のジニーに対する愛情は恐らく常識を越えている。

淫らな妄想でジニーを汚したりもした。ジニーの知らない頭の中でジニーに触れる。ジニーの唇を奪って…なめらかな背中や細い脚、そしてその肌に唇を這わせて……だけど僕の妄想はいつもその先へはいけない。

ジニーを壊してしまう気がして。今だって充分詐欺みたいなものだけど…医者の仮面を被った狼だって…そんなことは決してジニーに悟られてはいけない。

愛しい、という感情はどうしてこんなにも残虐性を孕んでしまうのか。

大事に大切に守ってやりたいと思うのも本当で。
壊してしまいたいというのも事実で。

嘘偽りの現実で、
ジニーだけが真実。

6. 孤独

「ジニー」

目を覚ますと、空気が湿っていた。窓の外に目をやると、雨。

アタシは鏡の前に座り込んで、鏡に手を這わせた。

『コーデイ、起きて』

『ん：おはようジニー』

コーデイはいつもの笑顔でニコリと微笑んだ。

『今日は雨ね』

アタシがそう言うと、コーデイは窓の外を見つめた。

『ここからちょうど真向かいに見える部屋が俺の部屋だよ：つてウイリアムが言ってた。雨の勢いがすごくて、今日は見えないわ』またウイリアムの話。

48

：でもコーデイの幸せはアタシの幸せ。

ウイリアムとコーデイは愛し合っている。

アタシに二人を引き裂く権利はない。

コーデイは話を続ける。

『アタシね、ウイリアムが帰ったあと、いつも向かいの棟を見つめるの。ウイリアムの姿が見えるわけじゃないけど：ウイリアムがいることを想いたくて』

やめて

やめて

やめて

神様はどうとう天秤を壊してしまったみたい。

コーデイがウィリアムを愛する重さが重すぎるから。

神様にも見放されたアタシ：アタシには、誰がいるというの？

カチャッとドアが開く音がして、振り返るとクロルドが入ってきた。
アタシは急いで鏡から離れる。

「おはよう、ジニー。もう起きてたんだね。よく寝れた？」

そう言いながらお風呂場の方へ歩いていく。

アタシはクロルドの後を追って、後ろからクロルドの服の裾を引っ張った。

すると、クロルドが振り返ってキスをしてくれた。

「今日は蒸し暑いからね。着替え、涼しいの持ってきたよ。ボディーソープもシャンプーもリンスも、みんな新しいの用意したから」

アタシが頷くと、クロルドは浴槽にお湯を溜めてくれた。

「ジニーがお風呂に入ってる間に朝食持ってくるから：また後でね」
そう言ってクロルドは部屋を出て行った。

アタシは服を脱いで浴室に入り、シャワーを捻った。

温かいお湯が身体を滑っていく。そして目の前の鏡に映ったコーデイを眺めた。

『ねえジニー。ウィリアムはアタシのことをずっと愛してくれると思う？：ううん、愛してくれなくても、構ってくれるだけでいい』

アタシはわざと意地悪なことを言った。

『信じていいの？また裏切られるかもしれないのよ』
言った後に後悔した。

それでもコーディは話を続ける。

『ウィリアムはアタシに、俺は信じてって言うてくれたの』

アタシは嫉妬した。

『信じていいの？簡単に信じて、簡単に裏切られて、まだ繰り返したいの？一時の快楽に溺れても、その後の孤独が余計に酷く感じるだけなのに。それでも一瞬が勝るの？』

『俺にはコーディだけ、って言うてくれた！けど…わかんない』

『アタシにはコーディだけなの！！コーディ、アタシを愛して！アタシはコーディを裏切らない。今までそうしてきたように、これからもずっと…』

湯気でコーディを映す鏡は曇ってしまった。

ふと自分の鎖骨の下あたりに紫色の痕を見つけた…これはキスマーク…。

胸の辺りが苦しくて、スポンジにソープを泡立てて、思い切り痕を擦った。

どうしても消えない痕。

ウィリアムがコーディに残した…。

ソープの香りが甘くて、少し酔ってしまった。シャンプーも同じ香りがする。

きつとこれも特別。

クロルドはいつも優しくて…いつも特別をくれて…どうしてこんなに心地良くさせてくれるんだろう。

なのにどうして触れるとあんなに冷たいんだろう？

クロルドはアタシのアスピリン。アタシを鎮めてくれるお薬。だけど飲み過ぎたらとても危険。中毒気味のアタシはクロルドがいないと何もできない。

きつと呼吸すら上手くできないだろう。

湯舟に浸かりながらそんなことを考えていたら、のぼせそうになったので、あがることにした。

クロルドが用意してくれたのは半袖のパススリーブとドロワーズ。

身体を大きなバスタオルで拭いて、服を身につけてベッドのある部屋に戻ると、クロルドがテーブルに朝食を運んでくれていた。

「ジニー、こっちおいで」

クロルドの元へ行くと、フワフワのタオルで頭を拭いてくれた。そして髪をすかして、ドライヤーで乾かしてくれた。髪を通るクロルドの指を心地良いと感じながら身を委ねた。

「ご飯ちゃんと食べるんだよ？少しでもいいからね」

そう言って、クロルドはキスをして出て行った。

アタシはあまり気の進まない食事をしながら窓の外へ目をやった。

相変わらず雨は窓をたたき付けるように降っていて……。

空に閃光が走り、酷い音がした。

…こわい…

口の中の物が飲み込めず、呼吸が浅く、速くなっていく。心臓が…
わしづかみされたみたいに痛くて。

どうしてこんなに苦しいの…こわい…
…こわい…

不安を埋めてくれる物を探してベッドに横になった。
枕をすぎるように抱きしめて、羊を数える。

…羊が一匹

…羊が二匹

…数える度にアタシの体温は失われ…きつと二度と目を覚まさない。

それなのに。

神様、

なぜアタシはまだ生きているのでしょうか？

【幻覚と妄想の挟ま】

「クロルド」

雷が轟く。

いつもより早い昼食を持って、ジニーの病室へ向かった。ジニーが脅えてるような気がして。

ドアを開くと、あまり手のつけられていない朝食が目に入った。

ジニーはベッドの中だ。

「ジニー、寝てるの？」

声をかけると、ジニーが焦点の定まらない瞳で布団から顔を覗かせた。

「ご飯あんまり食べてないね」

ジニーの顔が強張る。

安心させる為にジニーの頭を撫でた。

ジニーは今にも泣き出しそうな、頼りない表情で手を伸ばしてくる。

僕はジニーの背中に腕を回して、抱き起こしてやった。

すぎるように、僕の胸に顔を埋めるジニー。

「すごい雷だね。怖い？」

コクンと頷くジニー。

小さな肩が震えていた。

余りに儚くて、現実には存在するには耐え難い。しばらくジニーの背中を撫でてやっていると、震えは治まった。

「ジニー、これ食べれるかな？」

僕は昼食と一緒に持って来たマスカットをジニーに見せた。皮をむいて口に運んでやる。

「おいしい？」

ジニーが頷いて、少し笑ったのを見て安堵した。

本当はちゃんとした食事を摂ってほしいのだけど、果物だけでも口にしてくれた方がいい。

放っておいたら何も食べなくなってしまう。

いくつか皮をむいて、ジニーの口に入れてやる。

指先に触れるジニーの唇はやわらかい。

一瞬、狂暴な気持ちが沸き上がり狼狽した。

それに気付いたのか、ジニーは真摯な目線を注ぐ。

「あ…そろそろ行くね。マスカット置いていくから」

ジニーは僕から視線を外さない。

朝食だけ下げて僕は足早に出ていった。いつもの挨拶もできずに。

……自己嫌悪。

領域を侵してはいけないのだから。

「ウィリアム」

渡り廊下を歩きながら外を眺めた。降りしきる雨を見ると、何か頭の片隅が朦朧とする。

掌に残る柔らかい感触と腐敗臭。

これはなんだろう…？

気分が悪くなる。

途端、頭の中に閃光が駆け抜けた。

『殺して』

『私を殺して』

『娘を返せ!!』

『人殺し!』

『愛してるわ』

『殺して』

『ねえウィリアム』

『私、こんな世界もう見たくないの』

『私を殺して』

『人殺し!』

『人殺し!!!』

『人殺し!!!!!!』

：頭が痛い。

コーディ：コーディに会えば、きっと解放される。

俺はフラフラしながら、廊下を歩き続けた。

『ジニー』

そろそろコーディと交代する時間。

アタシは鏡の前に座り込んだ。鏡の向こうにはコーディが悲しそうな笑顔で座り込んでいた。

コーディ、どうしてそんな顔をしているの？

アタシはコーディの頬に手を触れる。コーディもアタシの頬に手を伸ばした。

『おはよう、コーディ、交代の時間よ』

『おはよう、ジニー、そしておやすみなさい』

現実が分からない。

そういえばコーディと出会ったのはいつだっけ？

アタシはコーディのことを何も知らない。

現実が分からない。

ううん。

現実なんて見たくない。

こんな世界、いない。

コーディとアタシは二人でひとつ。
あれ？

何かがおかしい。

コーディって誰だっけ？

「ウィリアム」

頭痛はおさまった。ドアを開くと、コーディが振り返る。あどけない笑顔と、濡れた唇。
ベッドの上、コーディの隣に座る。

「マスカット？」

コーディは頷いて、俺に剥いたマスカットを両手で差し出す。
俺はそれを口に含んで、そのままコーディの濡れた指も舐めた。

半袖から伸びた細すぎる腕：左腕が少し歪んでいた。
普通の大人の手首程しかない足首。
そして手首に無数の傷痕。

凝視しすぎて、それに気付いたコーディは後ろに手を隠してしまった。

「コーデイ…」

俺はコーデイを抱き寄せた…瞬間、甘く良い香りがした。その匂いに誘われるように、コーデイの首筋に軽く歯を立てた。身をすくませるコーデイ。

血管が透き通る肌。

手を取って、その手首の傷痕に舌を這わす。

刹那、空に稲妻が走った。

酷い落雷の音がする。

そう遠くないだろう。

コーデイがギュツとしがみついてくる。小さな肩が震えていた。

「ここには落ちないから大丈夫…俺がいるから、な」

何度も頭を撫でて落ち着かせる。

「コーデイ」

音が怖い。空間が怖い。

今まで目に入らなかったものが…耳に届かなかったものが…。

天使は羽根を降らせてはくれなくなった。

突然現れた世界と、突然消えた世界。

温かい…ウィリアムが頭を撫でてくれる。

醜い傷痕に触れた舌は温かくて。

ウィリアムは気持ち悪くないの？…こんなアタシの身体が。

ウィリアムに嫌われてしまうのが恐くて、恐くて、ウィリアムの温かい背中に腕を回してしがみついた。
離れていかないでと強く願いながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1514e/>

花葬

2011年1月13日01時08分発行